

まずは

コミュニケーションから

作家
鈴木
光司

すずき・こうじ 1957年静岡県浜松市生まれ。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。1990年デビュー作『楽園』で、日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。ホラーブームの火付け役となった『リング』をはじめ『らせん』『ループ』などが次々とベストセラーに。『リング』シリーズ以降は、『主夫』として子育てを行った実体験をもとにしたエッセイも多く執筆。最新刊『なぜ勉強するのか?』（ソフトバンク新書）

つい最近「日本の子どもたちは世界で一番孤独」というインターネットニュース*が流れ、ふと目をとめてしまった。先進国の中で、日本の子どもたちは飛び抜けて高いパーセンテージで、孤独感を感じているという。もしこれが事実だとしたら、その原因はコミュニケーション不足にあるのではないか。

ぼくは常日頃から、コミュニケーション能力の欠如は、日本が抱える大きな問題の1つだと考えている。なにしろ、その根は深く、教育の問題と関わっている。

次回長編小説のテーマに太平洋戦争（主に特攻攻撃）を取り上げるつもりなので、昭和初期から太平洋戦争に至るまでの実録映像を見る機会が多い。当時の日常の暮らしぶりを生の姿で知りたからだ。戦前の学校風景が映されたビデオの中、先生に指された子どもが立ち上がって自分の意見を述べるシーンがあったりすると、子どもたちは、能面のような表情で、周囲の大人たちが求めているであろう意見を差し障りなく喋ったりする。子ども本人が喋っているのではなく、周囲を取り巻く情緒の呪縛を受け、何者かに喋らされているかのような印象を受ける。個を集団の中に埋没させ、個性を消してしまっているためか、言いたいことの中身は弱い。きちんと表現するための前提として、まず自我の確立が必要なのだと再認識させられた。

昨今の教育の課題として「個性の尊重」が謳われているのは確かだ。しかし、個性を育てるための具体策が、教育の現場に盛り込まれているのだろうかと思ってしまう。いくら立派なスローガンを掲げたところで、日本という土壌の中で個性的な人間を育てるのは難しい。相当な覚悟がいる。

●
ぼくには2人の娘がいる。妻が高校教師であったため、時間的に自由である小説家のぼくが、赤ん坊の頃から2人の娘たちの子育てを担当してきた。10年前に妻は教師を辞めて専業主婦となったが、長女が大学生、次女が高校生となった現在も、教育に関する責任のほとんどをぼくが受け持っている。

特に力を入れてきたのは、娘たちの作文指導である。ひとつぼくのやり方を紹介してみよう。

まず最初に、何でも構わないからあるテーマを



与えて自由に作文を書かせる。本を読ませてその内容について作文させてもいいし、社会問題をテーマに取り上げてもいい。

すると子どもたちは実にとりとめのない内容を書いてくる。たいがい、何を言いたいのかさっぱりわからない。子どもたちの心の中で言いたい事がらがまとまってないからだ。そこでほくは最初のアドバイスを出す。

「きみの頭の中で言いたいことがまとまってないだろう。まず、じっくり、考えてごらん。自分が何を書きたいのかを必死になって考えるんだ」

2回目の作文は、1回目より少し明瞭になっている。何か言いたいことがあるらしいのはわかる。しかし、この場合の「言いたいこと」は、周囲にいる大人たちが喜びそうなこと、世間一般の意見、世論に合わせたような内容に過ぎない。戦前のビデオと同様、何者かに喋らせられているようなものだ。世の中に媚びているといった感じ。そこで第2のアドバイス。

「批判を覚悟の上で、きみ独自の意見をもっと強く表現してごらん」

3回目の書き直しにはようやく自分の意見らしきものが形成されてくるが、まだ足りない。

「きみならではの特色を出すんだ。何のための表現なのか、よく考えてごらん。きみでしか出せない意見に、価値があるんだよ」

そう言われると、子どもたちは相当に悩み始める。自分とは何だろう、自分と他人との違いは何だろう、と心の中を探り始める。十分に悩ませ、考えさせた上で、ほくは具体的なアドバイスを出す。

「最初の1行を書き換えろ。1行目をきみらしい個性のある文にしてごらん」

作文は書き出しが勝負。最初の1行を変えれば、そこに個性が現れ、文章全体が再構築されていく。あとは仕上げとして論理的に筋道が通るようにすればいい。

作文教育を通してほくが子どもたちに望んだのは「個性を身につける」ことにほかならない。個性がなかったら、よりよい表現など生まれようもないからだ。それはほくが小説を書く上での姿勢でもある（作文教育の件は、ほくの近著『なぜ勉強するのか?』ソフトバンク新書の中で詳しく述べたので、興味ある方は参考にしてください）。

食卓のテーブルにおいて、ほくは娘たちと色々なことを話す。哲学とはいかなる学問であるか、哲学がいかに大事かと、熱心に喋り過ぎたせいか、長女は現在、大学の文学部哲学科に籍を置き、次女もまた文学部哲学科志望である。父親の影響力はすこぶる大きい。

つい先日、ある審議会の委員として会議に臨み、自分の意見を効果的に取り上げてもらうために、ほくがどのような戦略を立てたかという体験談を語るのに夢中になって、夕食の時間が長く引き延ばされてしまった。



世界共通の論理と個性を調和させ、独自の意見が形成され、しかもその意見が有効であるという自信を得たなら、議論の場でなるべく多くの人間に理解してもらうよう最大限の努力を払わなければならない。胸の内に強く言いたいことがあるのなら、表現は自然と工夫されていく。大上段に構え、説教臭をぶんぶん漂わせて喋っても、だれも聞いてはくれない。おもしろおかしく、ジョークや譬えを使って喋り、頃合を見計らって本題を畳み掛ける。反復と一撃のバランスが、周囲を説得させるためには必要なのだ。

娘たちはときに笑い、ときに質問をはさみながら、ほくのちょっとした自慢話を聞いていた。大学のゼミや高校のクラスでの発言時に役立つと思ったからに違いない。

もうおわかりだろうが、審議会において自分の意見を主張するためにたてた戦略は、子どもたちと効果的にコミュニケーションをとるための戦略とも重なる。子どもの前でおもしろく話すということは、子どもに迎合することとは異なる。どうしても人に伝えたいこと、表現したいことがあれば、効果的に伝わるように工夫するはずである。父親の権威を振りかざし、説教ばかり垂れても、子どもたちは退屈するだけだ。まず聞こうとしない。おもしろおかしく、人に興味を抱かせるように喋ろうとする態度が大事である。

子どもたちには表現の極意を学んで、コミュニケーションの達人となってもらいたい。 ■



* 国連児童基金（ユニセフ）が2007年2月に発表した、先進国に住む子どもたちの「幸福度」に関する調査報告。「孤独を感じる」と答えた日本の15歳の割合は29.8%と、OECD加盟の25か国中、最も高かった。以下、アイスランド（10.3%）、ポーランド（8.4%）、フランス（6.4%）、イギリス（5.4%）などが続く。

危険予測・回避能力を養う 効果的な指導



東京学芸大学教授 渡邊 正樹

安全管理から安全教育へ

ここ数年、全国の学校において防犯教室の実施が推進されています。平成17年12月に文部科学省から都道府県および国立大学法人に対して通達した「登下校時における幼児児童生徒の安全確保について」の中に、「幼児児童生徒が犯罪に巻き込まれないようにするためには、幼児児童生徒に危険予測能力や危険回避能力を身につけさせることが必要である」と記されています。平成13年に大阪教育大学附属池田小学校で発生した学校への侵入者による児童殺傷事件以降、文部科学省や教育委員会、警察庁が中心となって学校における防犯対策が推進されてきましたが、当初は安全管理的な側面が重視されていました。しかしその後、通学路での児童への凶悪な犯罪行為が続いたこともあり、安全管理に加えて安全教育を充実させることで、児童自身の危険予測・回避能力の育成が強調されるようになりました。

文部科学省の調査によると、児童に対して防犯教室や防犯に関する訓練等を実施した小学校の割合は、平成17年度の実績で96.1%となっており、前年度から約10ポイント上昇しています。筆者は平成17年暮れに東京都の公立学校を対象として、防犯教育の実態調査を実施しました。東京都の公立学校では、独自の防犯教室であるセーフティ教室を実施しており、小・中学校の防犯教育の実施状況は非常に良好でした。しかし、いくつかの課題も指摘されていました。例えば、学年・全校単位で実施する学校が多く、学外講師による指導が多いという特徴があり、児童が主体的に取り組むような学習方法はあまり取り入れられていないことなどです。児童の危険予測・回避能力を養うのならば、以下に述べるような指導の工夫が必要と思われるます。

危険予測・回避能力を養う視点

危険予測・回避能力を指導するうえでのポイントをいくつかあげてみたいと思います。

危険予測・回避能力を身につけるためには、まず危険に関する知識の習得が重要です。どのような場面で、どのような危険が存在するのかを理解することが危険予測、さらには危険回避の基盤となります。

防犯教育に焦点を絞ると、「場所・時間」と「行為」が問題になります。前者は犯罪が起こりやすい場所と時間があるということです。小学生が被害にあう犯罪の半数以上は駐車場と道路で発生しているように、場所に特徴があります。また同じ場所でも人目が少なく、犯罪が発生しやすくなる時間帯があります。このような犯罪発生の特徴を知ることは非常に大切です。

またもう1つの重要な柱は、「行為」について学ぶことです。犯罪の手口を知ることは、被害を防ぐ第一歩です。例えば近年被害が増えている「振り込め詐欺」も、犯罪者がどのような手口を用いるかを知っていることで被害を回避することが容易になります。児童への指導では、略取誘拐を目的とする犯罪場面では犯人はどのような甘言で子どもたちをだまそうとするのか、どのように車に誘い込むのかなどを学びます。できるだけ具体的な事例を取り上げ、現実場面と結びつけることが効果的と思われるます。

このように危険な「場所・時間」および「行為」について学んだら、それらの危険をどのように回避するかということになります。危険を回避するとは、危険な場所や行為にできるだけ早く気づいて、危険な状況を回避して自身の安全を図ることです。そのためには、近づかない、逃げる、助けを求める、などがあげられます。さまざまな危険

な状況を例として、自分が選択すべき行動を考えることは児童にとって大きな力となるでしょう。

もちろんどんなに危険に対して注意を払っていても、犯罪に巻き込まれて危機的な状況になることがあります。「手をつかまれる」「体を触られる」などがそうですが、その場合も危険回避と同様に「逃げる」「声を出す」「助けを求める」ことを学びます。

どのような指導の工夫が可能か

では、上記の視点に基づいてどのような指導の工夫が考えられるのでしょうか。具体的な指導内容・方法と注意点について述べたいと思います。

まず「場所」に注目した代表的な学習活動としては、地域（あるいは通学路）安全マップづくりがあげられます。近年広く普及してきた方法ですが、さまざまな工夫が考えられます。地図そのものに慣れていない低学年児童では、危険な場所のイラストを用いて、その場所がなぜ危険であるかを実感させます。また外に出て活動する場合は、保護者あるいは高学年児童と一緒に行動するとよいでしょう。同じ場所でも時間帯を変えて踏査することも効果的と思われます。なお、マップの作成や発表においては、教師は地域住民の人権にも十分配慮したうえで指導にあたる必要があります。「行為」については、通学路で児童が誘われるような場面（例：「おもしろいゲームがあるから、一緒に遊ばない？」）をイラストで示したワークシートかパネルを用意して、なぜその「行為」が危険なのか、さらにその「行為」から身を守る対応を学びます。ここで注意しなければならないことは、不審者について先入観を児童にもたせてはいけないという点です。防犯教育の教材の中には、しばしば不審者として「サングラスをかけた中年男性」が登場します。しかし実際は子どもたちに対する加害者の中には未成年者も少なくなく、女性であるケースもみられます。また、「知らない人」に注意するように指導する場合も多いと思われませんが、顔見知りの人が加害者になる場合もあります。学習すべきことは「人」ではなく「行為」なのです。

なお、最近はいわゆるサイバー犯罪に子どもが巻き込まれる危険性が指摘されています。インターネットを通じた物品の不正な売買、あるいは電

子掲示板での脅迫などでは中・高校生だけではなく、小学校高学年も巻き込まれる危険性があります。児童でも容易にパソコンや携帯電話が使える環境にある今、特に安全教育として注目すべき課題と思われます。例えば「知らない人から携帯電話にメールが送られてきた」状況を設定して、正しい行動を考える（あるいはいくつかの行動の選択肢を用意する）学習内容が考えられます。

危機的な状況への対応については、イラストなどをを用いた事例によって、何が正しい対処か、なぜそれが正しいかについて考えます。ある程度学習が進んだら、ロールプレイ等を用いて、より実際の学習に進むとよいでしょう。また危機的な状況が発生したという状況を設定（シミュレーション）して、具体的な対応を複数の児童で話し合っ、よりよい対応を選択することも効果的と思われます。

交通安全・防災への応用

防犯を例として危険予測・回避能力を育成する指導について述べてきましたが、もちろん交通安全や防災においても同様な教育を進めていくことができると思います。交通安全においても、「場所・時間」と「行為」はやはり大きな要素です。交通事故が起こりやすい場所・時間を知り、事故を誘発するような行為（飛び出しなど）を理解できるような指導を行います。防災においても、同じ場所でも天候によって大きく環境が変化することを知らせることはきわめて重要ですし、それによって危険を回避することが可能となります。

以上述べてきたことは、自分自身の身を守ることを中心とした学習ですが、それに加えて徐々に周囲の人たちが被害にあった場合の通報方法等、他者の安全確保に発展させるとよいでしょう。

わたなべ・まさき 専門は健康教育学全般。文部科学省「地域で子どもを見守る全国ネットワークシステム検討会」主査、独立行政法人教員研修センター「学校危機対応研修教材作成に関する検討会議」座長、文部科学省「防犯教室事例集作成協力者会議」座長など歴任。ビデオ教材「危険から自分を守れ！」監修（光文書院）、最新刊に「学校安全と危機管理」（大修館書店）がある。小社より「ワークシートで身につける！子どもの危険予測・回避能力」が刊行される。

自分の命は自分で守る

～子どもの安全対応能力を高める取り組み～



福岡県大牟田市立吉野小学校教諭 中野 一成

はじめに

これまでのわが国は、世界からも「安全な国」と言われ続けてきた。しかしながら、近年、その「安全」神話が大きく揺らいできている。

さまざまな残虐な事件が新聞紙上にぎわっている現在、特に「子ども」にかかわる事件が増加してきているように思う。

そのため、学校に子どもを預けている保護者の危機意識にも高まりが見られる。そこで、保護者と地域との連携を図りながら、「自分の命は自分で守る」ことができる子どもを育成するための学校教育のあり方を考えていくことが急務であると思われる。

本校の実態

本校は、昨年度（平成18年度）創立50周年を迎えた歴史と伝統をもつ学校であり、「あいさつ日本一」をめざし、明るく素直な473名の児童が集い、活気にあふれている。

校区は大牟田市の北東部に位置し、周囲は緑が多く山や田畑に囲まれている。そのため、あまり手入れされていない竹藪や雑木林が多く、児童の登下校時にも安全面での注意が必要な地域であるといえる。

また、本校高学年児童の58%が、不審者またはそれらしき人物を目撃したことがあり、学校への不審者情報も比較的多いほうである。登下校の際に不審者が出やすい場所として、「病院の駐車場」「竹藪の近く」「神社の周り」などを意識している子どもたちもいる。その反面、校区内に120か所ある「子どもSOSの家」の存在をあまり知らない児童も多い。加えて、不審者対処法を聞いてみると、「大声を出す」「すばやく逃げる」といった回

答は多かったが、「不審者との距離をおく」「子どもSOSの家」や店に逃げ込む」といった回答は少なかった。

これらの実態をふまえて、本校では登下校中の安全確保と子どもの安全対応能力の育成に力を入れている。

実際の取り組み

取り組みの実際について、「学校としての組織的な取り組み」「学級担任としての指導」「地域との連携」の3点から述べることにする。

(1)学校としての組織的な取り組み

本校では、毎週水曜日に「地域ごとの集団下校」に取り組んでいる。全学年5時間授業である水曜日に、6年生の児童をリーダーとして地域ごとに並んで帰宅させている。水曜日以外の下校は、学年ごとの地域別集団下校を徹底し、1人で帰ることのないように指導している。

また、第4学年1学期には、総合的な学習の時間で「安全マップづくり」を学習するようにしている（資料1参照）。この学習では、行動範囲が広がる4年生の子どもたちが、危険箇所等を自分で判断できるようになることをねらって実施している。この活動を通して、第4学年の子どもたちは「人気のない暗い通り」「見通しが悪い場所」「民家が少ない場所」などには十分に気をつけて登下校をしたり、遊んだりするようになってきている。

(2)学級担任としての指導

私が担任する第5学年では、体育科保健領域で「けがの防止」の学習に取り組んだ。この学習に

【資料1】「安全マップづくり」の学習内容

時	学習内容
1 2	・SGLの方のお話を聞く。 ・不審者が出没しそうな場所および危険箇所の見つけ方を探る。 ・自分が登下校する道やよく遊ぶ場所の中から、危険と思われる箇所を出し合う。
3 5	・校区内を地域ごとに探索し、不審者が出やすい所はどこか、危険な所はどこかなどを近所の方にインタビューしたり、写真撮影したりする。
6 7	・調べてきたことをもとに、通学路や校区内の「安全マップ」をつくる。
8	・全校児童に向け、「安全マップ」を発信する。

*SGLとは、退職された警察官などの人材を学校現場の安全教育に派遣する福岡県の事業。



SGLの方と地域の安全を確かめる4年生



安全な距離の取り方のロールプレイ

において、学校内で起きたけがの種類やその原因について、調べ活動を通してまとめていった。この保健学習を行うとともに、子どもたちに「自分の命は自分で守る」態度と能力をはぐくむことを主眼とした安全指導を関連づけて展開した。

具体的に、子どもたちに身につけて欲しい力として、以下の3点を子どもたちとともに考えた。

- ①危険を予測する力
- ②危険を回避する力
- ③具体的に危険に対処する力

ここでは、交通事故やけがの防止だけでなく、通学路を中心に「1人だけで帰る道」「死角になっている通り」などを出し合い、子どもSOSの家や店などの場所の確認を行った。

また、第5学年の学級活動「不審者への対応」において、安全指導を行った。まず、危険を回避するために、「1人で出発かない」「知らない人についていかない」「出かけるときには行き先と帰宅時間を親に知らせる」ことを確認した。これらについては、ほとんどの児童が実践しているようであった。

次に、不審者と出会った場合の具体的な対処のしかたを、ロールプレイングさせながら指導を行った。ここでは、以前に警察署員の方から教わった次の3点について確認し合った。

- ①「キヤー」などの高い声ではなく、低く大きな声で「ワー」と叫ぶ。
- ②不審者に対して、腕の長さ以上の距離を常にとる。
- ③動けない場合は、石のように丸くなってしゃがみ込む。

①については、各自が実際にいろいろな声を出して見て、高い声の場合は子どもたちが遊んでいるときの声と思われることがあるということに気づかせていった。

②については、教師が不審者役を行い、何人かの児童の腕や体を捕まえようとするロールプレイを行うことによって、安全な距離について体感させていった。

③については、手足を隠すことによって、不審者が連れ去りにくい姿勢になるということを確認させた。

(3)地域との連携

大牟田市では、各校ともに地域ボランティアの方々「子ども見守り隊」として活躍されている。子どもたちの登下校時に、黄色のベストを着用したボランティアの方が校区内の危険箇所などに立ち、子どもたちの安全を見守ってくださっている。今では、たくさんの方々活動されているので、犯罪抑止にもつながっているのではないだろうか。

おわりに

これだけ安全への危惧が増大している現在、単発的な安全指導ではなく、繰り返し、継続的な指導の必要性を感じた。また、「自分の命を自分で守る」ために、単に不審者への対処方法を教えるだけでなく、「なぜ、その方法がいいのか」を理解させ、子どもたちの行動変容につながる指導方法を工夫していくことが大切であるように思う。つまり、実際に大声を出したり、断り方の練習をしたりするなど、実践的・体験的な活動を随時取り入れていく必要があるのではないだろうか。

(なかの・かずなり)

新刊の
ご案内

子どもたちを犯罪被害から守るために!

ワークシートで身につける!
子どもの
危険予測・回避能力



東京学芸大学教授
渡邊正樹 著

学校 家庭 地域で
子どもの安全を守るために!
おさえておきたい41のQ&A
この1冊で不審者対策は万全!
光文書院

平成19年5月末ごろ発売予定!!

ワークシートで身につける!
子どもの
危険予測・回避能力

東京学芸大学教授 渡邊正樹 著

平成17年12月、文部科学省から都道府県教育委員会等に出された通達『登下校時における幼児児童生徒の安全確保について』の中に「幼児児童生徒が犯罪に巻き込まれないようにするためには、幼児児童生徒に危険予測能力や危険回避能力を身につけさせることが必要である」と記されています。

今、学校が緊急に取り組まなければならないこれらの問題を、「学校」「通学路」「家庭・地域」の3分野に整理しワークシート化した、教師必携の書です。

定価1,300円 (税込)

B5判・112ページ

< 「はじめに」より (抜粋) >

現在、学校はもちろん地域でも、子どもの安全確保を図るためのさまざまな対策が進められています。私自身も優れた実践をいくつも目にする機会がありました。しかしその反面、私がしばしば耳にするのは「学校の防犯対策をどのように進めていけばよいのか」、「学校と地域はどんな連携が可能なのか」、「適当な防犯教育の教材が見つからない」という現場からの声です。本文中でもふれていますが、筆者が平成17年暮れに実施した防犯教育の現状に関する調査でも、同様な回答がみられました。

本書はこのような悩みを抱えている学校関係者、そして保護者の皆さんに役立つように企画したものです。本書はいわゆる「不審者」から子どもたちの身を守ることを取り上げていますが、学校内外で「これはいけない」、「こうすべきだ」ということだけを記述しているわけではありません。「なぜこれは危険なのか、または安全なのか」という根拠を示そうという意図があります。

これは学校関係者、保護者の方々向けに記述した部分だけではなく、本書の約半分を占めている児童用ワークシートにも同様のことがいえます。子どもたちに対して、「こうしてはいけない」ことを知ってもらうのではなく、子どもたち自身の危険予測・回避能力を高めることをねらいとしています。各ワークシートでは、具体的な場面を設定して、どこにどんな危険があるのか、どのような行動をとるとどのような結果が生じるのかを予想できる力を養ってほしいと思います。そのうえでどのような対処が適切なのか、すなわち危険回避能力を身につけてほしいと思います。

もちろんワークシートで取り上げている問題に対して、常に正しい解答が1つだけあるというわけではありません。またワークシートに示した選択肢以外にも適切な行動がある場合もあるでしょう。この教材を用いて、教室で、家庭で、子どもたちといっしょに考えてください。それは子どもたちがいざという場面できっと役立つはずですよ。

本書の主な内容

第1章／不審者対策の基本的な考え方と進め方

第2章／学校における不審者対策

教師用 Q & A

- ①学校への不審者侵入を防ぐには、どうすればよいですか。
- ②学校への不審者侵入対策に有効な施設・設備について教えてください。
- ③学校への不審者侵入に対応した危機管理マニュアルの作成のしかたを教えてください。
- ④学校で行う防犯避難訓練の進め方を教えてください。
- ⑤学校行事の防犯対策は、どのような点に配慮すればよいですか。
- ⑥学校危機管理や防犯教育遂行時の、関係機関・団体との連携の進め方を教えてください。
- ⑦教職員の危機管理意識を高めたいのですが、防犯避難訓練以外にどんな方法がありますか。

児童用 Q & A

- ①学校の中で知らない人を見かけたら？（低・中・高）
- ②きょうしつからひなんするとき、どうすればいい？（低）
- ③校庭に様子のおかしな人がいる。（低・中・高）

第3章／通学路における不審者対策

教師用 Q & A

- ①通学路の安全点検は、どのように行えばよいですか。
- ②校外学習時の子どもの安全確保について教えてください。
- ③地域と連携した通学路の安全確保はどのように行いますか。
- ④児童の危険予測・回避能力の育成のためには、どのような学習が必要ですか。
- ⑤不審者情報を学校と保護者で共有する方法を教えてください。
- ⑥学校への脅迫電話や手紙には、どのような対応をすればよいですか。

児童用 Q & A

- ①こわい人って、どんな人？（低）
- ②いつも見かける人からさそわれた。どうする？（低）
- ③車の中の知らない人から道を聞かれた。（中）
- ④車のそばにいる人に、荷物を持ってとたのまれた。（高）
- ⑤近所の人にさそわれたら？（低・中）
- ⑥あぶない場所って、どんなところ？（中）
- ⑦だれもない家に帰ってきたとき注意することは？（中・高）
- ⑧しつこくついてくる人がいる！（低・中・高）
- ⑨知らない人にうでをつかまれた！（低・中）
- ⑩友だちがつれていかれた！（中）

第4章／家庭や地域における不審者対策

保護者用 Q & A

- ①子どもだけで留守番をする場合には、どんな注意が必要ですか。
- ②子どもが外へ遊びに行くときに注意すべき点を教えてください。
- ③子どもたちが公共交通機関を利用する際に、安全面で注意すべき点を教えてください。
- ④不審な電話がかかってきたら、どのように対処したらよいですか。
- ⑤子どもが安全にインターネットを使うには、どんな注意が必要ですか。
- ⑥子どもが安全に携帯電話を使うには、どんな注意が必要ですか。

児童用 Q & A

- ①家の人がるすのときに電話がかかってきた。（低・中）
- ②家の人がるすのときに宅配便をとどけにきた。（中・高）
- ③エレベーターに気をつけて！（中・高）
- ④まいごになった！（低）
- ⑤遊んでいたら、いつのまにか暗くなってしまった！（中）
- ⑥塾の帰りはどうしよう？（高）
- ⑦知らない人に写真を撮られた。（低・中）
- ⑧パソコンを使用中にメッセージが！（高）
- ⑨ケータイに知らないアドレスからメールが！（高）

第5章／資料編

児童用Q & A

全ページ、使いやすい見開き構成。
児童用は全部で22の項目があります。

「Q & A」の「Q」。簡潔な問いかけと
イラストで、具体的な場面や状況をイメ
ージすることができます。

教師用Q & Aと保護者用Q & A

教師用Q & Aは13、保護者用Q & Aは6つの項目で
構成されています。「教師用」は、学校管理者だけで
なく、すべての教職員がおさえておかなければなら
ない児童の安全について、詳細に述べています。
「保護者用」は、保護者向けに書かれていますので、
保護者会などで説明する際の参考資料としても配布す
ることができます。「児童用」とあわせて、家庭や地
域の不審者対策に効果的です。



いつも がつこうかえりに 見かける おとな
の人が はなしかけてきた。「ねえ、おもしろい
ゲームが あるけど、いっしょに あそばない？」
どうしよう？



【解説】日ごろから見かけている人だから大丈夫という
わけではありません。このような人は子どもたちにとっ
て「知らない人」とは限らないうので、「知らない人」
から声をかけられるケースだけに限定しないで指導しま
しょう。この場合ほもちろん④です。②や③もその場面
では大丈夫かもしれませんが、子どもたちの警戒心が低

子どもが外へ遊びに行くときに注
意すべき点を教えてください。

A 犯罪被害に限らず、子どもが危険な場面に
出会う場所や機会をさまざまに決める
ことができます。万が一、ご
ごころから家庭で
す。
■どこへ行くか、いつ帰るか
子どもだけで外出する場合、
帰るかを家の人に知らせること
から出かけるように指導しま
す。すぐに家の人に連絡するよ
うに携帯電話を持たせていま
せません。しかし携帯電話の
状況も考えられます。携帯電
話の有効ですが、目の前に
能をもっているというわけ
■安全な場所を選ぶ
登下校と同様に、安全な
ところでもありません。また、
よく知っている安全な場所
の情報を地域安全マップ
に特記して注意したいのは、
す。特に町と町の境界近く
くとも少ないうちでも
審者情報は自宅や学校のあ
り多いため、通常情報の情
ホームページなどを見て
町村在住の知人から防犯
の工夫が必要ですが、
■もし遊びが遅くなると
遊びは夢中になって約束の
まもれません。特に夕刻で
なければならぬ場合、可
能な
とよいでしょう。
例えば、自宅に近い友達
りの多いところへ出て公衆
銭か携帯電話で近道
道帰ろうとしたり、近道
たりするのは危険です。



家の人に、どこへだれと遊びに行くか、帰りは何時ごろかを伝える。

↑保護者用Q & A
教師用Q & A→

第4章 家庭や地域における不審者対策

■道に迷ったら、人と話をしたら
ふだんから遊び慣れている場所とは違う場所へ出かけることも
あります。何かに夢中になったり、ちょっとした気の緩みから一
人はぐれてしまったりすることがあるかもしれません。また、知
らない土地では道に迷うこともあるかもしれません。そのような場

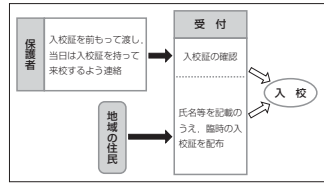
子どもが外へ遊びに行くときに注
意すべき点を教えてください。

■学校行事の防犯対策は、どのよう
な点に配慮すればよいですか。

A 学校行事は多くの人が出入りします。多くの人の目
があるため安全と考えられることもありますが、保護者に
まじって不審者が侵入する危険があるともいえます。
学校行事であるとはいえ、通常学校が行うべき危機管
理は変わりません。そのうえで学校行事における防犯
の留意点について考えてみたいと思います。
なお以下の活動はP T A役員・保護者らのボランティアが担当
することを前提とします。
■学校敷地内への出入口を限定する
校外者が多数入校するといえ、出入口は限定します。通常、
校門のみとして、他の通門用は特別の理由がない限り施設し
ません。もちろん校門から入校するように指示を出しておきま
す。
■入校証を配布する
保護者が学校行事に参加する意のある人には、あらかじめ保
護者であることを示す入校証を持って来校するようにと連絡を
しておきます。保護者以外の地域住民には、受付所で氏名を
記載して、当日のみ有効の入校証を配布します。入校証は氏名
を記入して、胸につけるか、首に下げるようにしておきま
す。また保護者と保護者以外では入校証の色を変えたいと思
います。なお配布の際、入校証を紛失したり、他人に渡したり
しないように説明します。臨時の入校証は退校時に回収しま
す。
■臨時の受付を設ける
保護者や地域住民が入るときに受付を通るようにし、保護者
の場合は入校証を確認し、地域住民に対しては上記のように
入校証を手渡します。受付所ではできるだけ校門近くの校舎
外で、受付を通らないと入校できない位置に設置します。



校外者が多数入校するときは、出入口を限定する。



■警備
学校行事のときは特別に警備会社などに警備を依頼することも
必要かと思いますが、もしP T A役員・保護者に協力をお願いする
場合は十分な準備が必要です。
まず警備のマニュアルを用意します。子どものうなものでなく、
1枚の紙に記載したものがよいでしょう。記載内容は、
①一般的な対応のしかた
②緊急時の対応のしかた
③緊急時の連絡先
④校内の地図（本部などを書き込む）
以上の4点が必須事項です。
警備とはいえない不審者を取り押さえることが目的ではないので、
入校への案内と不審な状況の発見、および緊急連絡に限定したほうが
よいでしょう。なお警備は2人以上の組になって担当することとし、
長くても1時間程度で交代するのがよいでしょう。
警備する場所は校門付近、校舎への出入口付近、死角になりやす
い場所付近（駐車場など）です。運動場では校庭も対象となりま
す。警備担当者は腕章をつけるなど周囲にわかるようにします。
■学校行事の案内上での注意
ところで、学校行事を行うにあたり、校外者へ連絡することがあ
りますが、最近学校のホームページ上で行事予定表を載せている学
校が見受けられます。しかしこれには危険が伴います。
ホームページはだれでも見ることが出来ます。例えば学校へ悪意
をもつ校外者が目にするなどで、いつ学校へ入りやすいかという情
報を与えてしまうことにもなりかねません。学校のホームページで
は終了した行事を紹介することと、これからの行事については
配布物で伝えるほうがよいでしょう。
■旅行・集団宿泊的行事での危機管理
旅行・集団宿泊的行事では、学内で行う行事以上に多くの事件・
事故が想定されます。また保護者によるボランティアへの協力を得
にくい場合もありますので、学内での行事以上に注意を払う必要が
あります。この点については第3章の「校外学習での安全対策」（p.
42～43）を参照してください。

- 【注目】
- 学校行事での危機管理はボランティアの協力を得て行う。
 - 来校者は入校証を身につける。
 - 警備は複数の組になって、担当箇所を見回す。
 - 警備マニュアルを準備する。
 - 学校のホームページ上には行事予定表を載せない。

あなたならどうする？

- ① いつも いる人なので、
ちょっとだけ あそんで
かえれば だいじょうぶ。
- ② 「いえに かえってから、
あとで きます」といって
かえる。

- ③ そのぼで ゲームを
見せてもらう。
- ④ 「かえります」といって
すぐ かえる。

こたえ

下して、次の機会に危害を加えられる可能性もあります。下校時は寄り道をしないで、帰宅するように指導することが基本です。◆関連 P.46~47

想定している場面や、おさえておきたい内容に対応した「学年表示」です。低・中・高学年で目安を示していますが、いずれの学年でも使用可能です。

「Q&A」の「A」の例。基本パターンは4択形式です。児童が「Q」の問いの趣旨をよく理解してから、答えを選ぶようにさせてください。答えは、下の囲み欄の中に記入します。

「記入欄」です。児童が答えを記入した後、なぜそれを選んだか、正しい答えや行動はなにかなどについて学習を深めていき、最後に「おさえておきたいポイント」をここに記入させます。誌面下段の「板書例」は、スペースの関係上、必要最小限の短文にしています。

下段は【解説】【解答例】【板書例】で構成されています。「教師用Q&A」や「保護者用Q&A」と関連のあるページは「◆関連」のマークで、そのページを提示しています。児童に配布して使用する際は、下段の部分をマスキングしてコピーするなどしてご使用ください。

「教師用・保護者用Q&A」の文末には、おさえておきたいポイントを「注目！」としてまとめています。ひと目でその項目の主旨をつかむことができます。

■ご注文は、直接下記までお申し込みください。

株式会社光文書院 電話 03-3262-3271
FAX 03-3230-4190

<h1>FAX注文書</h1>		ワークシートで身につける！ 子どもの危険予測・回避能力	定価 1,300円 (税込)
お名前			ご注文数 冊
お届け先	学校名 _____ ご住所 □□□-□□□□		